わからない。例えば、被災者が600人いるとして、統制されて設備も充実した600人と大混乱している600人では当然違いますし、水が出るところと、水が出ないところでは、予防の体制も変わってきます。実際に行った人から伝わる情報を大切にすべきです。しかも、その情報が日赤やDMATの隊員など訓練されている人からの情報では、差が出ることはありません。

浜松赤十字病院は、浜松市の北部地区で災害医療連絡会を立ち上げています。浜松市と浜北区、医師会、警察、消防、連合自治会が一体になった、静岡県でも特殊な組織です。今、3年目を迎え、年に3回の会合を行い、その時の協力体制を整えています。はじめは「そこまでやるの?」と驚かれていましたが、今では理解が高まって前向きな会話ができるようになりました。地域に限った共通の問題に取り組めるのが大きな特徴です。これが市や県の広範囲だったら、難しいでしょうね。その時、少しでも被害を減らせるように、顔の見える減災に地域ぐるみで取り組んでいます。

弾性ストッキングの履き方を教わる女性

dERU(仮設診療所)の設営をする救護スタッフ

INFORMATION

「糖尿病教室」のお知らせ

●**低血糖**
7月6日(水)14時30分～15時30分
講師：看護師　藤森

●**運動療法 ～座って運動 あなたもいきいき元気～**
7月13日(水)14時30分～15時30分
講師：理学療法士　鈴木(文美)

●**～カンバセーションマップを使って～「インスリン注射」**
7月20日(水)14時30分～15時30分
講師：薬剤師　武田

●**災害に備えよう!!～日頃の備えが肝心です～**
7月27日(水)14時30分～15時30分
講師：薬剤師　渥美

会場：浜松赤十字病院　2階 研修ホール
※講師およびテーマにつきましては諸事情により変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

【お問合せ·ご予約は内科受付まで】
TEL 053-401-1111(代表)

「いきいき健康塾」開催のお知らせ

●日　時　平成28年7月23日(土)
13時30分　開場　　14時00分　開演
●場　所　浜松赤十字病院　2階　研修ホール
●講　師　浜松赤十字病院　リハビリテーション科部長
小川　真司(おがわ　しんじ)
●演　題　『 **健康寿命とリハビリテーション**
～動ける体でいるために～ 』
●対象者　一般市民　150名　(入場無料)
●共　催　静岡新聞社·静岡放送
●後　援　浜松市浜北医師会·浜松市医師会
●お申し込み方法
下記のいずれかの方法でお申し込みください
□電話[8時30分～17時00分(月曜日～金曜日)]
□はがき、FAXまたはEメール
[①郵便番号·住所　②氏名
③電話番号(携帯可)を記載してください]
受付後、当院から聴講券(はがき)を送付いたします
●お問い合わせ·お申し込み先
浜松赤十字病院　総務課　社会係
住 所：〒434-8533　浜松市浜北区小林1088-1
電 話：053-401-1111(代表)
FAX：053-401-1190
Eメール：redcross@hamamatsu.jrc.or.jp

編集後記

暑い日が続きます。皆様いかがお過ごしでしょうか。さて、浜松日赤ニュースは、これまで、イベントや教室の予定、院内での出来事などを地域の皆さまにお知らせしてまいりました。

インターネットによる情報収集が主流となった昨今、浜松日赤ニュースの発行形態等を見直すことになり、現在院内で検討をしています。これに伴い当院のホームページでは、これまで以上に情報をより早くお知らせしていく予定です。

ぜひ、ホームページにアクセスをお願いいたします。
http://www.hamamatsu.jrc.or.jp/

日本赤十字社　浜松赤十字病院
Japanese Red Cross Society
浜松赤十字病院　検索
〒434-8533 静岡県浜松市浜北区小林1088-1　TEL：053-401-1111　http://www.hamamatsu.jrc.or.jp

浜松日赤ニュース

浜松赤十字病院広報紙　　変わらぬ「博愛の精神」と住民に信頼される「地域医療」をめざして

Vol.343

当院救護班による熊本地震活動レポート

― 経験を地域の明日に活かしてゆくために ―

4月14日21時26分に熊本地震が発生。5日後の19日から23日まで、日本赤十字社静岡県支部からの要請を受け、浜松赤十字病院から7名が日赤救護班として現地で救護活動を実施。当院、鈴鹿副院長による、医療を中心とした現地の活動報告をレポートします。

益城町で診療、エコノミークラス症候群防止に課題

医師1名、看護師2名、助産師1名、薬剤師1名、事務職員2名で構成する7人の救護班を結成。出発したのは19日で、陸路を約1000km、15時間かけて日赤熊本県支部に入りました。熊本市内の様子は、ゴミは散乱していましたが、クルマも規制が無く流れているし、普通に生活しているように感じました。

仮眠をとって20日朝8時から始動。日赤熊本県支部で打ち合わせをし、私は被害が大きかった益城町の総合体育館に向かいました。益城町に近づくにつれ家が崩れている箇所が増え、道がひび割れているところも目立ってきました。体育館に着くとdERU（仮設診療所）はすでに設置されていて、そこで診療を行うことに。37名の方を診察しましたが、ほとんどが外傷、不眠、慢性疾患の方でした。地震で直接怪我をしたというのではなく、家の片付けをしていて手や足を切ってしまった人が多くいました。

資材を救急車に積込む浜松赤十字病院救護スタッフ

そして、エコノミークラス症候群の人も。車中泊の人が多いので、どうしてもエコノミークラス症候群になりやすい。ところが、気づいていない人がとても多いのです。この病気は、もともと血流が悪い人だけでなく、普段、健康な人でもなります。だから、気づくのが遅れてしまう。予防のための弾性ストッキングを配るなど注意勧告をするのですが、車中泊をする人たちの多くは片づけや仕事に行ってしまうので、昼間はいません。そこが、課題です。

熊本市では徹夜で緊急に対応

夜に熊本市内に戻り、熊本赤十字病院で救急外来診察をしました。Walk in（自力で診察に来る人）を含めた救急外来診察数は、1日に350人。夜中でも、ひっきりなしに患者さんが来ます。トリアージブースで患者さんの容体を判断し、ここでは緑と黄色のタグづけをしました。そして緊急性の高い黄色タグの患者さんから順番に診るのですが、バタバタしていてカルテを拾っては診るという感じでした。そんなとき、ある先生が「小児科が分かる先生はいませんか?」と声を出したのですが、皆うつむくばかり。小児科医の必要性を感じました。ようやく腰を落ち着けることができたときは、21日の午前5時をまわっていました。

全国から熊本へ向かう医師や看護師など赤十字スタッフ（博多駅）

日本赤十字社が設置した dERU（仮設診療所）内の様子（益城町）

被災者の診療にあたる鈴鹿副院長（中央）（益城町）

現場で見えてきた避難所の問題点

救急外来診療後は待機指示となり、情報収集と災害時の対策検討協議をしました。

22日には、DMATチームが活動中の阿蘇医療センターで診療の支援に向かいました。体育館内は徳州会TMATが活動し、体育館前のdERUは大阪赤十字病院が単独展開。一見、充実していそうに見えますが、連携ができていません。体育館に避難している800名は確認できていても、その他が不明でした。

下痢・嘔吐患者が発生していて、しかも一部の医師、看護師にも同じ症状が出はじめていました。ノロウィルスの蔓延初期段階にあるものの、隔離部屋が確保できない、トイレの水が使えない、土足厳禁が守れない、出入り口が複数あるなどが原因でした。これは、難しい問題です。感染症対策を考えれば、もちろん避難所は土足禁止です。しかし、命からがら避難所にたどり着いて靴を脱いでなどかまっていられません。誰も、避難生活が長く続くなんて思っていませんから。阿蘇の体育館では、応急処置としてブルーシートを敷き、その上を土足禁止にしました。感染を防ぐために仮設トイレも、設置しましたが、ちょっと歩くことが面倒になって使ってもらえない。もっと体育館近くの場所選びをした方がよかったと思います。

その時には「顔が見える情報」、その前には「顔が見える減災」

このように、実際に行ってみないとわからないことが多くありました。最も実感したのは、数字ではなく「顔が見える情報」の共有、申し送りが大切ということ。県や市町、警察からの情報は、どうしても数字になってしまう。数字だけだと、それがどのくらい逼迫しているものなのか、現場でどのくらい困っているのか、こちらは後回しでもいいのかなどが

倒壊した家屋

熊本地震　数字で見る日本赤十字社の活動

160班 約1,200人
派遣救護班数と人数

654セット
緊急セット配布数

約5,000人
患者診療数

18,980枚
毛布配布数

4班
dERU（仮設診療所）設置数

11,200枚
ブルーシート配布数

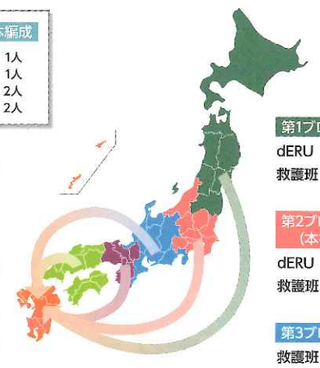
50人
こころのケア要員派遣数

6,401セット
安眠セット配布数

救護班派遣数（5月14日現在）

救護班（6人）基本編成

医師（班長）	1人
看護師長	1人
看護師	2人
主事	2人



支部		
第1ブロック支部	dERU	1班
	救護班	13班
第2ブロック支部（本社含む）	dERU	1班
	救護班	22班
第3ブロック支部	救護班	16班
第4ブロック支部	dERU	2班
	救護班	38班
第5ブロック支部	救護班	43班
第6ブロック支部	救護班	28班